

## 東アジアの村上ワールドに映る 日本のモダンとポスト・モダン

柴田 翔

〔等身大の中国人たち〕

この本を読んでいると何よりもまず、著者の楽しそうなお喋りの声が聞こえてくる。村上春樹の作品を愛読する一方、中国現代文学研究の専門家として中国語圏の歴史・思想・政治・社会・文化に幅広い関心を寄せている著者は、知的好奇心に駆られるままに巡り歩く途上で得たさまざまな見聞・風物を、勿体ぶることなく気軽に読者に教えてくれる。

いや、お喋りと言っても、決して取りとめない雑談ではない。それは熟練の文学研究者だけができる村上作品の深層の解析であり、また長年の蓄積あって初めて可能となる、政治的矛盾に満ちた中国語圏の賑やかな風景の、鋭利で実証的な解析なのだが、そうした仕事をむしろ知的快樂として、面白がりつつ進める著

者の楽しそうな表情が文中の随所から伝わってきて、読者もその快適なリズムに乗せられ東アジアの現在を覗き見ることになる。

中国研究の世界でも、今や昭和はほんとうに遠くなつたものだなあ――。

一九三五年（昭和十年）生まれで、敗戦後の近代主義的時代に知的基礎を得た評者は、本書の頁を楽しくめぐりながらもそうした感慨に心を奪われて、門外漢である自分が長年、脇から眺めてきた日本の中国研究（ないしは中国観）の変遷を遠くに思い浮かべる。

明治以来の漢学の世界に反発して辛亥革命以降の同時代中国に関心を寄せた若き帝大生、竹内好や武田泰淳は、私の学生時代、中堅の評論家、作家だったが、彼らの著作にはいつもひそかに漢学から

藤井省三著

村上春樹のなかの中国



受け継いだ、悠久三千年の中国の歴史と文化への畏敬の気配が漂っていた。

また彼らを受け継ぎつつ中国研究を志した、私と同世代の人々の若々しい理想主義的情熱が夢みたものも、決して人民を収奪することがないという八路军と中国共産党の神話に支えられた、輝かしい新中国像だった。

やがて文化大革命の時代には、頭上に振りかざされる赤い毛沢東語録と造反有理の叫び声が、制度の中に埋没した戦後民主主義の欺瞞に苛立ちつつ壮大なるゼ口を渴望した全共闘の学生たちの心を、強く深く揺さぶっていた。

こうして、日本の知識人にとって中国は久しい間、それぞれの理念と憧憬を投

四六判 280頁  
朝日新聞社 [1260円]

影する幻灯の映写幕だった。勿論そうした幻影は中国研究の分野に限ったことではないし、またそこにはそこなりの切実さと人間的実実があつた訳だが。

全共闘の時代にわずかに遅れる世代に属する著者が、こうした先行世代をどう評価し、どう批判しているのかについては、私はまったく知らない。だがこの軽やかな本を読みながら、むかし垣間見た先行世代の重厚で時として重苦しいさまざまな中国論を思い出すと、ああ、ここには、よくも悪くもわれわれと同じような等身大の人間としての中国人たちが描かれているな、と気づき、この本の魅力の在りどころを改めて知ることになる。

### 〔絡み合う二つの主題〕

さて、村上春樹作品と中国との関わりを主題とした本書は、およそ二つの部分に分かれる。その一つは村上作品に於ける中国の存在、特に近代日本の中国侵略の影の探求であり、もう一つは中国語圏における村上作品受容の過程と諸相を、台湾から香港、中国（上海から北京）へ

と時計回りに辿って行く、綿密にして生き生きとした実証作業である。全六章のうち第一章と第六章（の大半）が第一の主題に関わり、その間に挟まれた第二章から第五章までは第二の主題を追っている。

この両者は、差し当たりは別々の主題である。前者が作家の経験と作品内容に関わる作家論的論考であるのに対し、後者は基本的には事実関係を説明する作業である。だが一歩踏み込んで考えてみれば、中国の影を深く宿す村上作品に中国語圏読者たちがどう反応したかを知ることとは、一方で中国語圏の現在を理解することでもあり、また他方、村上作品の文学的内実について理解を深めることにもなる。第二の主題を扱う第二章から第五章が、第一の主題を論じる第一章と第六章で包み込まれる構成は、読者に二つの主題の関連性を暗示している。

### 〔ポスト・モダンに残る近代の影〕

本書を読むまで、私は村上作品の中に日本の中国侵略の影が色濃く差している

ことに、格別の注意を払ってこなかった。もちろんそれは村上作品の読者としての私の迂闊さなのだが、あえて弁解すれば、そこに多少の理由がない訳ではない。

村上作品に中国に関わる事柄が多く現れることには、読者も比較的容易に気付くだろう。だがそれはいつも、それ以前の日本に於ける通例の中国像とは、少し違う姿、形をしている。例えば『風の歌を聴け』のジェイズ・バーのバーテン、ジェイは、その抽象的な名前も含めて、現実の中国人であるよりむしろポスト・モダンの都市空間を構成する諸記号の一つである無国籍的存在として、作中に現れる。

その彼の背後に、実は昭和初期に東アジアの政治状況の中で関西のモダン都市に流れ着いた一人の中国人が隠れている、今も自分の民族的出自を完全に忘れていない訳ではないこと、そして彼と話す主人公にもおそらくは日本の対中国侵略戦争に関わって「上海で死んだ」叔父がいること、またそうした小説的細部が作家の現実的個人的記憶と密かに結びつい

ていることは、著者の綿密な追跡作業によつて初めて浮かび上がってくる。

また『羊をめぐる冒険』の読者は、巨大な邪悪を体内に宿す星形斑ほしがたまだらの羊が日本の満州支配に深く関わっていたことを知らされ、自分の命を先払いしてまでその邪悪さを滅却しようとする（鼠）の涙ぐましさには心を揺さぶられながらも、そのほとんど童話風の設定に誘われて、具体的近代史の諸事件よりも、むしろ斑羊に象徴される世界の邪悪さそのものへと視線を向けて行く。

近代小説の枠を越えたその語り口の奥に、実はそうした形でしか語りえない、自国の中国侵略への作家の思いが深く埋め込まれていることには、本書を読むうちに初めて気付くことになる。

従来もっぱらポスト・モダンの都市空間を描くとされることの多かった村上作品に、実はモダン日本の暗部、日本近代が遺した傷痕が深く刻み込まれていることを、この楽しく軽やかな本は、鋭く指摘するのである。

### 〔万華鏡に映る村上作品の姿〕

中国語圏での村上作品の多彩な運命とそこに反映する台湾・香港・上海・北京の政治社会状況を、著者は村上作品受容進行の「時計回りの法則」「経済成長踊り場の法則」「ポスト民主化運動の法則」の三原則を立てることによつて鮮やかに視覚化し、更に欧米での受容との対比を梃子にして中国語圏に於ける「森高羊低の法則」を確立する（欧米では『羊をめぐる冒険』の評価が高いが、中国語圏では『アルウェイの森』の評価が高く『羊をめぐる冒険』の評価は低い。但し香港は「森羊双高」）。

その四法則を軸にした、海賊版を含む沢山の翻訳の具体例提示と解析や、実例を示しての装丁分析、更にさまざまなレビューでの批評や反応の行き届いた紹介など、豊富で魅力的な論考の詳細は、ここでは言い尽くせない。ただ、その万華鏡のような叙述の中から、村上作品の重層性の問題が自ずと浮かび上がってくることには、触れておきたい。

前節で記したように、一見ポスト・モ

ダンの空間に閉じ籠もっているかに見える村上作品の基底には、近代日本の中国侵略の記憶が埋め込まれている。そして例えば台湾の翻訳者頼明珠氏（おそらく著者がいちばん信頼している中国語翻訳者）は、決してその事実を見過ごしてはいない。しかしそれはむしろ例外であつて、村上作品への中国語圏読者の熱狂は「経済成長踊り場の法則」「ポスト民主化運動の法則」の二法則が示すように、経済的にも政治的にも急速に変貌しつつある中国語圏諸地域の読者たちの感性が、もっぱら作品中のポスト・モダンの要素に共振したところから生まれている。

そう考えて改めて振り返ってみれば、「森高羊低の法則」に従つて中国語圏読者たちがつとも愛する『ノルウェイの森』も、村上作品としてはむしろ例外的に、ポスト・モダンの空間の孤独だけをひたすら変奏し続ける作品であることに気がつく。

しかも、本書が引用する彼らの村上賛辞を読み比べて行くと、作品中のポスト・モダンのと呼ばれる要素にも、更に少な

くとも三つの側面があることに気付く。

その第一は、今も触れたポスト・モダンの都市空間に於ける人間の孤独である。近代の論理と倫理が作っていた人間相互の関係性の網目が、現代の市場経済原理主義によって崩壊するとき、孤独はそこに住まう人間の必然的運命である。

本書によれば、中国共産党は〈村上は「現代資本主義国家の都市生活」における「人間性の貧弱」と「感情的色彩の衰退」を（批判的に）描きだしている〉という見解の下にその作品流布を公認したそうだが、それもポスト・モダン空間に於ける人間の孤独についての〈党的表現〉だろう。但し、党はそれを他人事と見なしているのに対し、社会主義市場経済下に生きる人々にとつて、ポスト・モダンの孤独は既に日々の現実である。

しかし村上作品に熱狂する人々の大半が望むのは、そうした孤独を厳しく直視することではない。本書の多くの証言が示すように、むしろ人間の孤独を語る作家の、半ば童話風の一（つまりポスト・モダンの）語り口こそが、見慣れぬ孤独に

悩む人々を慰めている。もつとも、理性を重んずる近代の立場からすればその語り口は、いささか妖しくいかかわしい魅惑・危険へと人を誘う、魔女サイレンの歌だとも見えるのだが。

だが近代主義は既に昨日の歌である。ポスト・モダン世界に戻つて更に言えば、そこにあるのは魂の孤独だけではない。快適に冷えたビールから白く清潔なマンション、明日には去つて行く男と女の出会いなど、感覚的魅惑に満ちて魂の深みには関わらない、軽やかで瞬間的なアイテムを、それはふんだんに提供してくれる。村上作品もいわば孤独の代償として、そうしたポスト・モダン第二の相である。快楽のアイテムを繰り返し描写する。そしてポスト・モダン多数派、孤独に虚しく悩むよりも洒落たアイテムとともに暮らすことに憧れる人々は、その描写に心を魅せられる。中国語圏で最初の村上発見の地、台北市には、そうした人々のために、作品名を冠したコーヒー店チェーンや村上をテーマにしたマンションが出現したと、本書は教えてくれる。

〔本書の先にあるもの〕

知的刺激を楽しみつつ本書を通読したあと、こうして一つの問題が残る。

多くの読者たちは（日本においても中国語圏においても）村上作品に描かれるポスト・モダンの孤独に心を揺さぶられながらも、その童話的語り癒され、そこに描写される都市空間のアイテムと快楽に魅せられる。少数の選ばれた読者だけがその後で、作家に残る近代日本の傷痕と出会う。

とすれば、村上作品に於いてそれらの諸要素は、どういう連関と力学のうちに置かれているのか？ 近代日本の傷痕とポスト・モダンの孤独は、どこでどうつながり、どこでどう切れているのか？ 村上春樹作品の核心は何なのか？

東アジアに展開する村上ワールドを軽やかに案内してくれた本書は、最後にそうした村上作品に関わる最終的な問いを残して、読者から立ち去つて行く。

（しばたしろう 作家）